



かせかけ

編集 沖縄県立看護大学
広報・情報委員会
発行 平成16年1月13日



わたしたちがつくりました
保健医療情報演習作品「禁煙」

目次

● 夢から現実へ：大学院博士前期課程および博士後期課程の設置 2	● 第3回ハワイ研修セミナーに参加して 9
● 禁煙にむけての本学の取り組み 3	● 学生の活動 10
● 本学における「統合実習」の取り組み 4	● 第5回看護大祭から 10
● シリーズ 教育・研究分野の紹介 5	● 性教育研究会に参加して 11
● 教員紹介(よこがお)	● 卒業生からのメッセージ 12
大嶺千枝子教授 6	● 関西学院大学学生との交流を通して 12
● 委員会活動 7	● わたしたちがつくりました 13
● 海外研修	● 図書館から 13
・第3回ハワイ研修セミナーを引率して 8	● 教職員の動き 14



夢から現実へ 大学院博士前期課程および博士後期課程の設置

学長 上田 禮子

県立看護大学に大学院看護学研究科一博士前期課程(修士)及び博士後期課程(博士)を同時に設置することは沖縄県の看護教育と看護の質向上にとって必須であるとの認識から平成11年開学当初から準備を進めてきました。紆余曲折を経ながらも文部科学大臣から設置申請を認可され、「夢から現実」になったことは多くの見識のある方々の支援と学内でも教職員、学生、卒業生の中に将来の沖縄の健康と看護に夢を持つ人々の努力があったから実現できたと共に喜び、また感謝しています。

さて、グローバル化の時代を迎えて新しい時代に生きるための教育の改革が世界的に進行中であり、日本でも例外ではありません。明治以来と称される教育改革が進行中であり、特に看護教育においては著しいものがあります。平成15年現在において日本看護系大学協議会会員校は104校あり、これらの大学レベルの教育を担う教員、および先進医療を保健・看護の立場から探究し、人々の健康上のニーズに対応できる看護職のリーダーが求められているのです。離島県沖縄ではこれらの人材育成が急務であることは県内の保健医療福祉関係施設長などを対象とした大学院設置に関する意向調査によって明らかになっています。すなわち、対象者の72%が「職員の再教育に利用させたい」と回答していました。

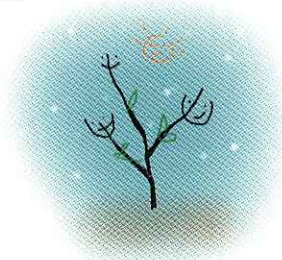
これらの現場のニーズと進学を希望する学生、ならびに大学の更なる発展を念頭に大学院では(1)博士前期課程;看護の各分野における最新の専門的学識や技術の修得を基本とした高度専門職業人の養成および研究能力を養う、(2)博士後期課程;新たな看護の課題をみつけて研

究し、看護方法の開発や新しい看護理論の創造ができる人材、そして、実践、教育に高度なリーダーシップを発揮する卓越した人材の養成をはかることとしました。

募集人員は修士課程1学年6人、博士課程は1学年2人です。毎年少数ながらも確実に卒業生を世の中に送り出すことが看護界の刷新になるであろうと期待しています。

本研究科は3分野5領域から構成されており、本県の特徴を考えユニークなものとなっています。3分野として文化間保健看護、生涯発達保健看護、先端保健看護があり、また文化間保健看護には保健看護管理と地域保健看護の2領域、生涯発達保健看護分野には母子保健看護、成人・老年保健看護の2領域、先端保健看護分野には新領域保健看護領域があります。内外から優れた教員を招へいしていますが、世界を視野に入れて地域の人々の健康の維持、促進、疾病予防、ケア、リハビリテーションに看護職の立場から実践、教育、研究活動に大学が貢献することです。

実践現場で働いている方をも大学院生として受け入れるカリキュラムも用意しており、多様な学生を受け入れ看護上(実践、研究、教育)の課題解決と教育研究に学術的に貢献すべく将来に向けて着実に歩み続ける新しい動きが始まります。





禁煙にむけての本学の取り組み

学生部長 加藤 尚美

平成15年5月から健康増進法の施行に伴い受動喫煙の防止をするために、施設管理者は必要な措置を講ずるよう努めなくてはならないこととされました。

本学は健康増進法で言われるまでもなく、平成15年4月から学内での喫煙を全面禁煙としました。これまで、学内にあった灰皿はすべて整理し環境を整え、時折学内を巡視し、喫煙状況を把握するよう努めました。

なぜ、禁煙を願うのでしょうか。看護職は国民の健康を守る専門職として禁煙を呼びかけなくてはなりません。呼びかけている看護職が率先して禁煙をするのは当然といえましょう。

さて、知っているつもりならばこの害について一寸触れましょう。たばこを吸っている人と吸わない人の違いから、虚血性心疾患の発症率は、たばこを毎日20本以上吸う人では、吸わない人の約5倍です。また、WHOの統計で6億人が罹患し、世界の死因の4位とされる慢性閉塞性肺疾患(COPD)患者の80~90%が喫煙者です。また、多くのがんについて、たばこを吸う人の死亡率は、吸わない人に比べて1.5倍から20倍高くなっているという報告があります。たばこを吸っている人は周囲にいる人にも迷惑をかけています。

また、若い女性とたばこは特に問題を多く含んでいます。女性は妊娠・出産、育児、教育等、胎児から子どもの成長に大きく関わり影響を及ぼします。本学の学生はあらゆる場でこのたばこの害を訴え健康な生活を導く役割を担っています。豊富な知識は、健康に導く行動を伴うことでしょう。

うれしいことに、私は、4月以来、学内でたばこを吸っている学生を見ていません。さすが・・と思ったり、喜んでおります。うれしい気持ちを、

ある先生に話しましたら「先生、それは自己満足よ」と言われました。そうでしょうか???きつと禁煙してくれていると信じております。どうぞ、自分の健康のために、そして周囲の人の迷惑を考え、喫煙は止めましょう・・と、本学の皆さんが軸となって禁煙運動を積極的にしていただきたいと思っております。

禁煙を成功させるポイント

1. まず最初に、タバコに関するものを身の回りにおかないように!
2. 禁煙して6時間ほど経過する頃から、さまざまな離脱症状が現われてくるがありますが、そこをガマン!

タバコを吸いたくなったら

- ・深呼吸をゆっくり3~4回する
- ・コップ1杯のお水をのむ
- ・「私はタバコを吸わない」と声に出していう
- ・散歩をする
- ・軽い体操をする

◎離脱症状はどのようにして現われるのでしょうか?

タバコをやめてから

- 1日目: なんとなく手持ちぶさたになり、イライラしてきたり、精神集中が難しくなる
- 2日目: イライラに加え、軽い頭痛、肩こり、眠気などの症状が強くなる
- 3日目: 上記の症状がピークになる。ここを乗り切るのが重要
- 4日目: 症状は続いているも、徐々に楽になる
- 5日目: 殆どの喫煙者が強い離脱症状から解放され、禁煙を続けられる自信がついてくる

3日目を乗り切り、5日目で自信がつくようになればもう安心!

なぜかウキウキした気持ちにさせてくれますよ!
周囲の皆さんにも教えてあげましょう

本学における「統合実習」の取り組み

教務部長 當山 富士子

本学では看護教育の体系を、基本科目、専門支持科目、専門科目、統合科目の4つの領域で編成しています。基本科目は、豊かな人間性と幅広い知識をかん養するための科目群で、専門支持科目は看護学を理解するための基礎を学び、専門科目へとつなげるための科目群です。また、専門科目は看護を実践するための知識・技術・態度を修得し、統合科目では、これまで学んだ知識・技術・態度を統合して応用力を養います。

「統合実習」(1単位)は、統合科目(原著講読、研究への導入、卒業論文、統合実習)の一科目で4年次の後期に実施されます。今年度は、11月～12月の間において5日間の実習が行われました。それでは専門領域の選択から半年余かけて準備が行われる「統合実習」の取り組みについて紹介します。

「統合実習」の目的は、これまでの領域別及び健康レベル別に実習した経験をもとに、学生が自由に課題を見つけ、主体的に実習の場を選択し、その課題に関する実習をとおして保健看護活動の広さと深さを学習し、専門職者としての態度を身につける。目標は、学生が選択したそれぞれの領域において自己の課題にあわせて内容を深めるとなっています。

4年次へ進級すると学生は、どの領域あるいはどの看護教員の下で実習をとるか希望調査が行われます。領域あるいは担当教員が決定されると、自己の課題にあわせて担当教員とともに実習計画書を前学期中に作成します。実習計画書の内容は、自己の課題、実習目標、実習施設名、実習場所、実習期間、実習内容、5日間の実習計画等となっています。

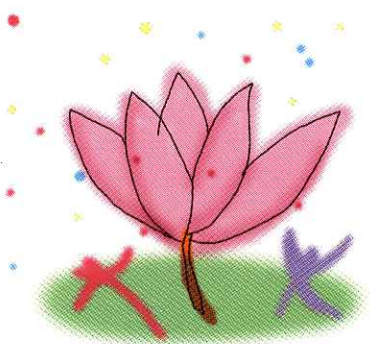
この実習計画書の作成にあたっては、どのよ

うな課題をどう深めていくのか学生と担当教員が最も時間をかけディスカッションを深めている部分です。

後学期に入ると実習先との調整が始まります。教員は全般的な説明は当初に行いますが、学生個人の計画等についての詳細な調整は、学生個人で行っています。臨地での実施も勿論のこと、教員は付かず学生が主体的にスタッフと連携し実習を展開していきます。

それでは実習を終えての施設職員の声や学生の反応はどうでしょうか。施設側の職員からは、「楽しそうに実習しています」「学生が積極的に反応が良い」という声が聞かれ、学生からは、「楽しかった。もっと時間があっても良い」「これまでゆとりがなくできなかったことが、今回は自分なりに考えながら実施できた」等々の声が聞かれます。

昨年と今年の体験から、学生が個々の課題に主体的に取り組むことが、こんなにも生き生きと活動させ自己洞察を深めていることに若いエネルギーの凄さを感じたものです。



シリーズ 教育・研究分野の紹介



老年保健看護

助教授 大 湾 明 美

某大学で教育と研究に挫折した経験をもつ私が、本学へ再就職したのは、やや大げさに言えば、自己の看護への再挑戦でもある。大学を飛び出した後、10年以上、実践の場で高齢者の在宅ケアにこだわり、対象の「老いざま」と向き合いながら、自己の「生きざま」を模索してきた。

本学での私の担当分野は、発達段階に応じて組み立てられた専門分野の一つである老年保健看護である。「老人看護学」は、1990年に看護教育カリキュラムに登場し、その歴史は浅い。少子高齢化社会の進展で、高齢者の社会保障やケアシステムの変革が緊急に求められる時代に、看護教育の分野でも、これまで成人看護学の分野に含まれていた老年看護を新たに「老人看護学」の柱だてをする必要性があった。更に、社会の価値観は、一般化から個別化、つまり多様な価値観を希求する時代、自己決定が尊重される時代になった。利用者本位、人権擁護、QOL(生命の質、生活の質、人生の質:生命を基盤とし、その上に生活があり、さらにその上に人生があるという階層的構造)、等の重視も加わった。このような価値観の変化から看護ニーズの変化を生み1997年には「在宅看護論」が新カリキュラムに加わった。医療機関などの施設ケアと同様、自宅でも在宅ケア(在宅看護)に携わる看護職者の教育が求められたのである。

本学の老年保健看護カリキュラムの主な特徴は2点ある。一つは、本学の他の専門分野同様、科目名が老人看護学ではなく老年保健看護になっていることもあり、高齢者の健康の側面を重視した教育をめざしている。もう一つは、老年保健看護に在宅看護論を包含し、個別性、利用者本位、人権擁護、QOL等の基本理念に基づく在宅看護を内容としていることである。

老年保健看護分野の開講科目は、講義・演習3科目、実習3科目の計6科目である。科目では、過去の実践経験から、経験事例を紹介し、実践の場での具体的な問題解決能力が育つこと、社会が求める新たな高齢者ケアの中での看護職者の役割拡大による看護観が広げられること等を心がけている。

研究は、生活者としての高齢者やその地域で暮らす人々、あるいは看護職者の看護実践に直接役立つような課題解決型のアクションリサーチを展開中である。沖縄県の特性としての離島をフィールドに、ソーシャルネットワーク、ケアシステム、住民参加、要介護支援、ケアマネジメント等が研究のキーワードである。研究フィールドの研究成果から高齢者ケア分野における看護職者の活動モデルを構築することが課題である。また、施設入所高齢者には、生きがい、ユニットケア等、個別性を尊重し人間の尊厳が保てる新たなケアのあり方も関心領域の一つである。

日々の「生きざま」の行き先に納得のいく「老いざま」があることを信じて勤しむのみである。



教員紹介 (よこがわ)



想いはいつもこの地に回帰して

教授 大嶺 千枝子

ここ、与儀の一角は那覇における看護教育発祥の地である。1960年、琉球政府立開放性那覇病院の二階に那覇看護学校が開校した。次いで、1991年、大学移行を目指し県立看護学校2校を統合して学生総数580名を擁する大規模校となり、沖縄看護学校が病院跡地に新設された。1999年に念願の看護大学が開学し、来春は大学院が開設される運びである。

看護教育の歴史を刻み続けるこの地は、学生として過ごし、新卒看護師として働き、教師となり学校長として学生を見守った所である。大学に関わり教育体制も学生も進化する様に、新たな時代の看護の息吹を感じながら通算19年を過ごした場所である。

先日、高校のクラスメートの那覇病院長から「定年の足音ひびく年の暮れ」と裏紙のメモが届いた、いよいよ定年なのだ。実習記録の山を眺め忙しい時間の中で、ふと、立ち止まる時、退く心境は複雑である。「月日は百代の过客にして、行き交う年も又旅人也」、逆らうことの出来ない時間の波に乗り今日までやって来た。昔と同じ風景を窓越しに眺めながら、看護に関わった43年、時空を超えて振り返ろう。

人生をマズロー風にみると次の通りです。1950年代の10代は、生理的欲求を満たす質素な時代であった。思い出すのも遠い昔のことであるが、当時、母校は進学校として名を馳せていたが私は、将来の見えない卒業を目前にしていた。ある日、担任の一言「女子生

徒は看護学校進学も良いですよ」で進路が決まった。入学試験は旧コザ市胡屋で行われ、前日に出かけて、親戚の家に一泊してのぞんだ。3年の春、コザ看の分離生として那覇看護学校の第一期生となった。

1960年代は20代、約60米ドルの給与を得るようになり安全安楽を得たが、ハワイ大学EWCで感じたことは、米国の豊かさでありエコノミーショックで安楽の格差に愕然とした。与儀公園で連日行われた復帰運動の歌声「～民族の怒りに燃える島～」が蘇り、また、琉球政府の政策として送り出された南米移住者に移民船ナースとして関わった時の心の痛みを思い出したりした。

1970年代は30代、国立公衆衛生院で保健師活動を楽しく思い始めた。WHOの奨学生として英国、デンマーク、スウェーデンで学んだ地域のヘルスビジターや地区看護師活動、行き届いた福祉行政は羨望以外に言いようがなかった。しかし、彼女等の福祉が国民をスポイルしていると語った言葉が印象に残っている。生活風景の中でカルチャーショックを受け、文化の多様さに目覚めた。

1980年代の40代、県保健行政の中で島嶼県の保健師駐在の意義を説き、厚生省に対しては本制度の承認を得て施設整備に明け暮れた。教育の場では保健師魂を是非とも学生に伝えるべく意気込んだりした。1990年代の50代、県看護行政の中で看護大学立ち上げ準備を終え、再び教育に携わり様々な学生から多くを学ばせてもらった。卒業時に見る学生の成長ぶりは目を見張るものがあった。近年は卒業生が自己の秘めたる可能性に気づけば自己実現にそれほど時間を要しない、何時も早く教師を乗り越えよと願った。

2000年代の60代、大学で看護史を体験として語っている。大学生生活も残り3ヶ月、進展する時代の橋渡しが終わられることを感謝します。何時も、学ばされている自己への気づきを大切にして、珠玉の一言が言えるようになりたいものである。

最後に更なる看護大学の発展を祈ります。

◆◆◆ 委員会活動 ◆◆◆

学生委員会 「がんばる！」

学生委員会副委員長 藤村 真弓



本学には、たくさんの委員会が活動しています。それぞれが、活動の目的を持ち大学がスムーズに運営されるために努力しています。学生委員会はその名のごとく「学生」に関わるすべてのことを取り扱う委員会です。本年度は加藤学生部長を中心に7名の教員と事務担当者で活動しています。新学期になってすぐしなければならぬことが、奨学金や授業料減免の申請に関する審議です。申請書をもとに審議し、規定に照らしあわせて可否を決定するのですが、書類内容だけでは正確な状況が把握できないので、本年から申請者全員に委員会メンバーが面接を行い、可否の参考にするようにしました。

学生の健康管理や学生相談もこの委員会の仕事です。日常的には保健室の利用状況などをチェックしますが、新学期に行う健康診断の計画や内容の検討、看護学生として必要な検査項目を見直したり、予防接種についての対応を行っています。本来、予防接種の対象となる疾患は子どもの頃にかかるものがほとんどであり、したがって予防接種も大学に進学する時点では終了しているはずですが、ところが、在学生の予防接種歴を調べてみると受けていない人が多かったり、記憶があいまいだったり、なかなか正確な情報が得られません。そこで、委員会で検討して入学時に一番の情報源である母子健康手帳をもとに正確な予防接種歴を記入した調査票を提出してもらうことにしました。しかし、予防接種の中には年数がたつと免疫力が低下するものもあり、

最新の状況を知るために、昨年より1年次全員に抗体検査を実施することにしました。この結果により抗体のない人や、低下している人には予防接種を勧めています。予防接種はあくまで個人の意志によって行われるもので、医療者が強制することはできません。しかし、看護学生のように、多くの医療機関に出入りする人は、自分を守り、患者さんを守るためにもきちんと必要な予防接種は進んで受けて欲しいと思います。

からだの健康管理だけでなく、こころの健康管理も大切ですので、学生相談も行っています。他県から入学して沖縄生活に適應できなかったり、学業や実習に関するストレス等を早めに解決して、より楽しい学生生活が送れるようにサポートしたいと考えています。各学年には、20名に2名の担当教員がいます。今年から、4年生は卒業指導教員が担当教員を兼ねることになりました。高校までの「担任」とは少し違うかもしれませんが、困ったことや、悩みがあったらぜひ声をかけて下さい。私たちが目指す医療職は、人の命を預かり、人の生き方を左右する力を持った仕事です。そういった仕事に携わるには、自分自身が健康で、人を思いやることができ、自立した存在でなければなりません。学生時代に経験するすべてのことが、自分の生き方に必ず生かされてきます。一人ひとりが、楽しく充実した学生生活をおくることができるよう、学生と一緒に精一杯「がんばる！」学生委員会でありたいと思います。

海外研修



第3回ハワイ研修セミナーを引率して

国際交流委員会委員

山城五月 玉城清子 吉川千恵子

本学では、ハワイ大学、カワイコミュニティーカレッジとの国際交流協定に基づき、本学学生を両大学に派遣し、語学の向上と、ハワイ州の保健医療福祉について理解を深めさせ、国際的視野で貢献できる人材の育成を目的に学生の交流事業を行っている。本年度も3回目となるハワイ研修セミナーが8月2日～8月23日の3週間の日程で無事終了した。今年も、同時多発テロ問題やアメリカ・イラク戦争、SARSの流行など国際情勢は厳しく、長引く経済不況の影響もあり、例年より少ない参加人数であった。また、参加した3年生10名、2年生4名と引率教員3名を含め、全員女性であったため不安や心配もあったが、学生に関しては、そんな状況にも、節度を守り、安全に、終始にぎやかに研修期間を過ごしており、引率教員としては、肩の荷が少しおろした気持ちであった。

本年度の研修プログラムの内容であるが、ハワイ大学とカワイコミュニティーカレッジにおいて、日常英会話や医療分野に関する英語研修、ハワイの歴史・文化に関する講義、ハワイの保健医療制度やホームヘルスケアなどの専門的講義、保健医療施設見学、異文化理解のための活動が

行われた。その一部を紹介する。

異文化理解のための活動として、本年度の新しい試みでは、自らも体験しながら、その技術を習得するハワイ伝統のロミロミマッサージと、講義と課外活動を通してハワイにある薬草の使用法や薬用効果の学習が加えられた。どちらも、英語とハワイ語を使っただけの授業であったが、先に講師が説明し、見学、実施と段階的にすすめられ、学生も繰り返し聞いて見ているうちに徐々に理解でき、自らも体験することにより受け身にならずに楽しく学習できたようだ。特にロミロミマッサージでは、指で筋肉をもみほぐす手法をアレンジして「名前をモミモミマッサージに変えて日本の看護界に取り入れよう？」と冗談もあり（本気だったのかな？）、心も体もリラックスし、研修の緊張もほぐされていたようだ。

医療施設見学では、緑あふれる観葉植物と明るく広いロビー、壁や床の装飾、心が癒されるような中庭の空間、幅広い廊下など、一見「ホテル？」と思わせる病院の構造と雰囲気、学生は圧巻していた。また、ITを用いた遠隔医療の進歩で島から島への無駄な搬送が省けたり、スタッフの労力削減になったりなど合理的で高度な医療システムにも「すごいなあ。いいなあ」と感動した様子だった。

カワイ島での3日間のホームステイでは、学生2人一組で一家族にお世話になった。学生は、ホストファミリーと寝食を共にし、英語でのコミュニケーションを駆使しながらも、お互い理解し合えると喜び合い、徐々にうち解けたようだ。またハワイの伝統料理をご馳走になったり、観光したりと、異文化を理解する貴重な体験と思いができ、とても充実した3日間だったようだ。

以上のように、ごく一部の紹介だが、英語や看護に関する事だけでなく、アクティビティも豊富な内容の研修が実現できるのも、本学とハワイ大学、カワイコミュニティーカレッジとの国際交流協定に基づくものである。将来、留学を考えている人も、まだわからないという人も、ぜひこの機会にハワイ研修セミナーに参加されることをお勧めする。

海外研修



第3回ハワイ研修 セミナーに参加して

3年次 西山 未希子

私たち3年生10名、2年生4名は、8月2日～8月23日の3週間、ハワイに海外研修に行きました。8月2日～16日はカワイで研修しました。カワイではカワイコミュニティカレッジ(KCC)で英語やロミロミマッサージというハワイ式のマッサージを学びました。英語はゲームやダンスや劇などをして、ハワイの文化にも触れながら楽しく学びました。ロミロミマッサージはオイルを用いてマッサージをするもので、気持ちよくて眠っている人もいました。来年の文化祭では、ハワイに行ったメンバーでロミロミマッサージをする予定なので、みなさんも体験してみてくださいね。病院視察では、ウィルコックス病院、ベテラン記念病院、マヘロナ病院へ視察に行きました。マヘロナ病院では、患者と一緒に海にピクニックに行きました。身体が不自由でも海で楽しめるように工夫されたベッドを用いて、介助しながら私たちは楽しい一時を過ごすことが出来ました。その時の様子は地元の新聞にも大きく取り上げられました。カワイに滞在中に3日間ホームステイをしました。最初は緊張しましたが、彼らの暖かいもてなしをうけ、

すぐに仲良くなれました。盆踊りや観光に連れて行ってもらいました。3日間ホストファミリーと一緒に過ごせたことで、ハワイの生活や文化を体験でき、とても良い経験になりました。

8月16日～23日はオアフで研修しました。オアフではハワイ大学マイノア校の看護学・歯科衛生学部で、ヘルスセンターにおける看護師の役割、リビングウィル、ホスピスケア、幼弱な子どもに関する研究について英語で講義を受けました。予習をして行っても難しかったです。アメリカの医療について学べ、大変勉強になりました。病院視察ではクィーンズメディカルセンター、ホスピスハワイ、シュライナー病院、ヘルスセンターに見学に行きました。そのなかでも、日本との違いが際立っており印象深いのがヘルスセンターです。ヘルスセンターにはナースプラクティショナー(NP)がいます。NPは看護師ですが、診察をしたり、処方箋を書いて薬を出したり、手術が出来ます。アメリカでは、看護師の地位が高くなっていると同時に、職務の範囲も広がっており、高い技術が求められていることが分かりました。日本でも、認定看護師や専門看護師といった専門性の高い看護師が出てきていますが、さらにこれからは、管理的な職務を担う看護師が増えていくことを期待しています。

ハワイ研修では日本とアメリカの医療や制度、文化の違いなどについて多くのことを学びました。ハワイ研修で学び、考える機会が与えられたことを大変嬉しく思います。今回学んだことは今後看護を学んでいくにあたって役に立てていきたいと思っています。



学 生 の 活 動

第5回看大祭から



この子達、双子？！

お姉ちゃん達は双子？！

ほくにも上手く抱けるかなあ
お母さんよく見てね



目指せ、初黒字!

焼きそば30kg売るぞ!



看大祭を終えて

第5回看大祭実行委員長 新垣 亮太

第5回看大祭が、去る5月31日～6月1日に開催されました。看大祭は地域の皆様と交流を持てる場を目指し、学生が主体となり企画・実施しました。アルコールパッチテスト、高齢者体験、糖尿病食の展示など様々な体験コーナーを設置し、本学の特色にふれていただけたと感じております。看大祭は全学年が参加できる日程を考えると他の大学祭と比べ早い時期の開催となります。しかし、学生が一丸となり看大祭を盛り上げ、また、年々内容が充実し地域の皆様に満足していただけたのではないかと思います。

学 生 の 活 動



性教育研究会に参加して
3年次 吉川加奈子

「性教育の研究会を創ろうと思っているのよ〜。」という加藤先生の言葉から発足されたOPCN性教育研究会。月に一度の勉強会には母性保健看護の先生方をはじめ、母性分野以外の先生、保健師さんや私たち学生が参加しています。

先生を外からお呼びして、あるテーマを決め講義をしてもらいます。講義は沖縄に焦点を当てており興味深いものばかりです。またその後に討論会もあり、激しい討論が繰り広げられています。無知な私がこの場にいてもいいものかと気後れすることもあります。

しかし本や文献からの知識だけではなく、現場の情報も知ることができておもしろいです。そして性に関する意識が世代間で違うのだなあと実感することもできます。その違いがまたおもしろいことでもあります。私と同世代の人は性について目上の人と話づらいと思います。しかしメンバーはあっけらかんと話しているので一度参加してみるとびっくりするかもしれません。さまざまな考え方を学ぶことができると思います。



学 生 の 活 動



卒業生からのメッセージ

1期生 知念久美子

こんにちは。県立宮古病院外科病棟に勤務している知念久美子です。今年の3月に看護大の1期生として卒業し、4月から県立宮古病院に勤めています。外科病棟といっても一般外科・泌尿器科・脳外科の混合病棟に勤めています。卒業して約9ヶ月。はじめの頃は白衣を着ることや「看護婦さん」と呼ばれることに違和感を感じていました。また、実習と違い多くの患者様を一人で見る責任、慣れない看護業務、幅広い分野の疾患の勉強などいろいろ大変でした。しかし、患者様に接するのは楽しくなっています。患者様の一日の様子をみていく事で患者様の全体像が把握でき、看護の視点が広がっていきました。

実際に働いてみて看護職は看護技術の向上のために調べる、実際に見る、実際に行うなど学習の積み重ねだと実感しています。そして、患者様に良い看護を提供するには誠意を持って接し信頼関係を築くことが大切だと感じました。私は多くのこと見たり、聞いたり、調べたり、患者様や家族の方とのコミュニケーションの方法など意識して実習に取り組んでほしいと思います。患者様に信頼される看護職者になるようにお互い頑張りましょう。



関西学院大学学生との交流を通して

3年次 井加田勝洋

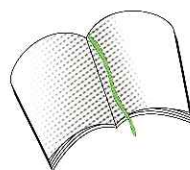
10月18日、私は吉川教授と仲宗根講師の誘いで、関西学院大学生と交流をする機会があった。この日は、琉球大学が幹事校となり、日本公共政策学会主催の『公共政策フォーラム 2003 IN 沖縄』が自治会館にて行なわれるという事で、関西学院大の学生は『沖縄の食生活と健康危機』についての研究を行い、その発表の為に沖縄を訪れたのである。そして、長峯教授とそのゼミ生14名は、その研究について不備な面や、資料についての意見を聞く為に沖縄県立看護大学を訪れたのだった。

何より驚いたのは、これらの研究を行ったのが、私と同じ3年生の学生だった事である。ゼミによって差はあるものの、長峯教授のゼミでは、3年生の時期になるとグループに分かれて共同研究を行うとの事であった。参加した14名は、総合政策学部の学生でありながら『沖縄の食生活と健康危機』についての研究をまとめたという事であった。他分野のテーマという事だけでも驚くべきであるのに、僅か1ヶ月で完成度の高い研究をまとめた彼・彼女等の言動は、傍から見ても自信に満ちていた。

この日の出来事を通して、私は学生の力の凄さというものを学んだ。私達一人一人に、この様に企画・運営をする力や隠れた能力があるのだが、それを生かすべき努力や、チャンスが無い為に燻っているのではないだろうか。私の知る限り、学生達の力があつたからこそ成り立っているという組織やイベントは幾つかある。自ら進んでいこうという姿勢、そしてそんな中に学生独特の遊び心を忘れないといった態度があれば、私達はまだまだ伸び、力を発揮し続けることができるのではないだろうか。今回の出会いは、そんな事を伝えてくれたのだと私は考えている。

わたしたちが作りました
—たばこの書をポスターで表現—

1. 「それであなたは命を守る？」
 ○希望掲示場所:病院、看護系の学校の命を守る看護職者には、自らの命も大切にしてください。
 上原利那 上原涼子
2. 「ちっちゃなころからワルガキでさ〜」
 たばこを吸っている君の肺は真っ黒。
 大城奈津子 松川菜美
3. 「看護師さんパパを止めて」
 ○希望掲示場所:病院、看護学校
 女性看護職者の喫煙率は、一般女性の約2倍です。あなたはこ
 の子を守れますか？
 新垣秀美 谷山紅美
4. 「たばこ⇒肺がんだけ？」
 ○希望掲示場所:呼吸器・心臓系の外来 まちの喫煙できる場所すべて
 たばこのイメージは、肺がんになるから、咽頭がんになるからなど、
 呼吸器のイメージばかりで、その他にも色々悪影響が出ることを知っ
 てもらいたくて心臓について取り上げました。
 山本弥生
5. 「私を見ないで!」
 ○希望掲示場所:本学内
 タバコは自らを枯らします。
 城間盛幸
6. 「僕の栄養はニコチン・タール・一酸化炭素・・・」
 ○希望掲示場所:産婦人科、デパート
 喫煙がどれだけ胎児にとって悪影響を及ぼしているか考えて欲しい
 です。母体と胎児はつながっているのです。
 金城夏世 浜里真衣
7. 「子どもきらいですか?」
 ○希望掲示場所:産婦人科
 妊娠時の喫煙は自ら子どもを危険な目にあわせることにつながりま
 す。たばこの害をちゃんと知ることが大切です。
 伊牟田ゆかり 新里奈津子
8. 「子どもは大人のマネをします」
 ○希望掲示場所:職場、小児、産婦人科外来
 「喫煙経験のある児童の全てに家庭内喫煙者がいた。又、喫煙
 したいと思っている児童の約9割に家庭内喫煙者がいた。」と
 という文献の調査報告を目にして、このポスターを作成しました。
 大人の喫煙が、子どもの喫煙の動機づけとなっていることをしっ
 かり考えてほしいと思います。
 H間くみこ 親川昌代
9. 「ぼくをタバコ家族に巻き込まないで!」
 ○希望掲示場所:保育園、小児科
 両親がタバコを吸っていると、将来子どもがタバコを吸う確率が高
 くなります。あなたが今、子どもの将来のためにできることは何ですか。
 宮里暁乃 屋嘉比麻菜美
10. 「あなたの煙 隣の人への凶器です」
 ○希望掲示場所:バス停
 公共の場での喫煙について考えてもらいたく作りました。バス停に
 限らず、タバコの煙が周りの人へ害を与えることを喫煙者にも非喫
 煙者にもわかってもらいたいです。
 高江洲千尋 宮城乃理子



図書館から

学外者の附属図書館利用状況について

附属図書館 主幹 盛島明哲

附属図書館では、本学が目指しているものの中の一つである「地域に開かれた大学」として、学術に関わる研究・調査を目的として来館した方(学外者)に対して、本学の教育・研究に支障のない範囲で、図書館サービスを提供しています。

利用者としては、浦添看護学校や種々の専門学校(学外者)の学生、次いで、看護師等の医療従事者が多数を占め、少数ながらその他の一般県民の順になっており、下表の統計のとおり、年々利用者が増えてきています。

利用者が増えている要因としては、看護大学附属図書館の存在を知っている方が増えてきたこと、平成13年度から実施している午後9時までの開館、琉大等、国立大学と比較しても看護系資料が充実していること等が大きいものと考えています。

図書館の利用形態をみると、館内利用では、図書、学術雑誌の閲覧、複写、及び貸出が主で、たまに、ビデオの視聴があり、また、館外利用として、他機関への複写依頼、資料の所在調査等の依頼があります。

これからも、学外者の利用は増えていくことになると思われませんが、学内利用に支障をきたさないよう努めていきたいと思えます。

年度別集計

	貸出冊数	入館者数	登録者数
14年度	1,056	2,257	325
13年度	1,069	1,943	275
12年度	846	827	247
11年度	92	496	40

平成14年度 (内訳)

	貸出冊数	入館者数	登録者数
医療従事者	402	838	147
他学学生	619	1,257	154
その他(一般)	35	162	24
合計	1,056	2,257	325

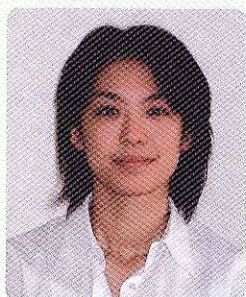
教 職 員 の 動 き



教授 安谷屋均

10月付けで就任し、形態学機能学を中心に担当することになりました安谷屋均です。これまでは、東京医科歯科大学難研成人病循環器疾患部門で不整脈の発生機序と抗不整脈薬の作用などについて基礎的に研究をしてきました。これからもこの研究を継続すると共に、これらの研究の成果を生かし、基礎医学から臨床医学への考え方を看護大学の学生に伝授したいと考えております。

沖縄は珊瑚に囲まれた美しい海と空があり、それに負けないくらいの人情あふれる県民の心の豊かさがあります。また、他府県にはあまりみられない独特の踊りや音楽などの芸能を持つ素晴らしい島でもあります。東京生まれ(両親は共に沖縄生まれですが)の私にとって感動することが多々あり、在職中は一つでも多くのことをマスターしたいと思っております(できれば方言も)。このような素晴らしい沖縄で現在生活していることをうれしく思い、学生教育及び研究を中心に専念すると共に看護大学が更なる発展を成し遂げるよう協力したいと考えております。



助手 吉田真美

5月より地域保健看護の助手として勤務しております吉田真美です。こちらへ赴任する前は、市町村の母子保健や老人保健事業の保健師業務に携わっておりました。学生へ教える立場となり、これまで以上に地域保健看護のことを勉強しなおしているという状況です。

出身は宮崎県都城市です。宮崎は、山の緑と水がおいしいところです。ぜひ、皆さん、一度は訪れてみてください。

沖縄で生活していて感じることは、太陽と海の輝きが素晴らしいと思います。また、琉球の芸術文化について興味があり、琉球箏や三線を習っておりましたが、現在は育児休暇中です。空手をいつか子供と一緒に習いに行くのも夢です。今後は、自分ができることを日々探求していきたいと思っております。よろしくお願い致します。



助手 鈴木香代子

2003年3月まで、大学病院に勤務し、外科・小さな救急病棟、小児病棟を経験してきました。教育に関する職に就くのは今回が初めてです。新しい環境で、心機一転、多くのことを学んでいきたいと思っています。

沖縄に来て、まず、感じたこと。「暑い」。10月ともなるのに、この暑さには驚きです。もちろん、沖縄に来たのは、今回が初めてです。パイア、アセロラ、バナナの木、見るもの全てが新鮮に映り、言葉の通じる外国に来たような気分で、沖縄での生活を楽しんでいます。よろしく申し上げます。

教職員の様子



助手 諸喜田睦子

母性保健看護助手の諸喜田です。西平先生の産休・育休補充として6月から勤務しています。私は、琉大病院で14年間、産婦人科・小児科看護に携わってきました。その後半年間訪問看護ステーション、そして3年間産業保健師として勤務していました。保健師として勤務する傍ら、平成13年に家族全員を対象に、保健指導・カウンセリングをおこなうことを主な業務とする助産院を開設しました。“ホームドクターはお母さん”をキャッチフレーズに狭義・広義の意味でのセルフメディケーションのできるお母さんの輪を広げていけたらと思い始めました。学生の頃から興味があった自然療法・代替医療の手法を用いています。実習を通して、自らの手のできる自然療法を学生に伝えていけたらと思っています。最近読んだ本でお勧めは「免疫革命」です。ぜひご一読ください。短い期間ですがよろしくお願ひします。



助手 上江洲貴乃

今年の7月より、玉代勢先生の補充として、基礎看護学教室で助手として勤務している上江洲です。

大学内で、まず目に留まったのが、廊下や学食で会った際、学生と教員があいさつを交わし、また授業外でも学生が研究室に立ち寄り、教員と話し合う光景でした。私が通った県外の大学では学生数が多かったせいか、親しくなれる教員は限られており、あまり見慣れない光景でした。

約8年ぶりに生まれ育った沖縄に戻り、看護を学ぶ学生達と接し、そして教育に従事している先生方と共に働くなかで、のんびり落ち着き、そして学生と教員が近い距離で接している、沖縄の和やかな雰囲気を改めて実感しています。またその環境は新鮮にも感じ、教育の環境づくりという点で大事にしていきたいと思います。私も本大学で、学生や先生方と共に働ける機会が得られたことに感謝し、そして私自身、看護者として成長し教育にも活かせるよう努力していきたいと思っています。

かせかけとは、琉球古典舞踊女七踊りの一つです。梶かせとは紡いだ糸を巻く道具で、梶掛けとは布を織る糸をこしらえている様子を指しています。この踊りのように丹念に糸を紡ぎ布を織って着物に仕立てていく、その一途の心と「技術」・「感性」は、「知識」の継承・創出とともに、本学の看護職者を生み育む教育・研究の原点に相通ずるものであろうと、広報誌の名称にしました。



かせと梶

沖縄県立看護大学大学院(保健看護学研究科)の開設について

本学に平成16年4月から大学院保健看護学研究科(博士前期課程及び博士後期課程)が開設されます。

募集する分野・領域、定員などの概要は、下記のとおりとなっております。

募集する分野・領域	分野	領域(専門科目)
・博士前期課程 ・博士後期課程	文化間保健看護	保健看護管理(保健看護管理) 地域保健看護(地域保健看護)(精神保健看護)
	生涯発達保健看護	母子保健看護(母子保健看護) 成人・老年保健看護(成人・老年保健看護)
	先端保健看護	新領域保健看護(新領域保健看護)

入学定員(収容定員)	博士前期課程	博士後期課程
	6名(12名)	2名(6名)

※収容定員は、完成年度の平成18年度の数である。

平成16年度の学生募集については、

■出願期間:平成16年1月13日(火)～平成16年1月22日(木)

■試験日:平成16年1月31日(土)

■合格発表:平成16年2月5日(木)

■募集人員:博士前期課程6名、博士後期課程2名

となっております。

※学生募集要項の請求など、詳細については、

沖縄県立看護大学事務局 〒902-0076 沖縄県那覇市与儀1丁目24番1号

TEL 098-833-8800 FAX 098-833-5133 <http://www.okinawa-nurs.ac.jp>

までお問い合わせください。

編集後記

かせかけ第5号は本学の新たな取り組みを紹介した内容となっております。まず、本学は「禁煙大学」を宣言致しました。表紙を飾った学生たちの演習作品が本学の姿勢を表しています。2004年4月から、いよいよ大学院教育が開始されます。学内外の優秀な人材を迎え、新たな時代を作り上げていくことが期待されています。今後も充実した紙面構成に向けて、皆様ひとり一人のご協力をよろしくお願い致します。

広報・情報委員会

沖縄県立看護大学

〒902-0076

沖縄県那覇市与儀1丁目24番1号

TEL(098)833-8800 FAX(098)833-5133

<http://www.okinawa-nurs.ac.jp>